土佐経営塾通信
［セッション］

Vol. 04
2021.07.31

価値観に
刺激を
うけよう

Session

特集 01
株式会社パトス / 代表取締役
永野 有希子

特集 02
Scratch株式会社 / 代表取締役
倉知　幸一

TOSAKEIEIJUKU TUSHIN
発行責任者：NPOこうち企業支援センター

専門経営者として生きる

7期生（2016年修了）

株式会社パトス
代表取締役
永野　有希子

これから紹介するのは永野有希子さん。まさに「美容師一族」の家系に生まれ、美容師であるご両親に育てられた。お父様は三店舗をもつ美容室経営者だったが、幼少期の永野さんが食べ物の好き嫌いを言うと、「お姉ちゃんたちがどんだけ一生懸命働いて、これが食べられると思っちゅうが」と彼女を叱った。そんな永野さんは、店が忙しいときには、遊びたくても美容室の手伝いを求められた。お父様の言う「お姉ちゃんたち」とはもちろん、雇用している美容師さんたちのことである。

彼女は三人姉弟の長女である。お父様は子どもたちに美容師を継ぐことは求めず、その口癖は「何でもいいからプロになれ」だった。そして、美容師一家に生まれた姉弟三人は誰も美容師にならなかった。永野さんも「何のプロになるかはさておき、社会の仕組みは理解しておくべき」と東京の大学の経済学部に進学。大学卒業後には、ご縁のあった鹿児島のお寺で生活し、鹿児島の会社に就職。そこで13年間勤務し役員にまでなった。小さな会社ではありながらも、建築資材や化粧品の輸入、文具製作、コンサート運営などを行っており、「『何かのプロ』にはなれなかった」（本人談）が、商売に関して多くのことを学んだ。

しかし、彼女の人生はそこから大きく反転する。美容師にならなかった永野さんではあるが、パトス代表である母親から「高知に戻ってきて美容室経営を手伝ってくれないか」と言われ、帰郷を決断する。そして、その過程に土佐経営塾があったということである。

2016年の夏、土佐経営塾の面接の場で、私は当時44歳の永野有希子さんに会うことになる。代表権は家族がもつとは言え、美容師でない永野さんが、これから美容室三店舗を経営していくと言う。これはある種の「専門経営者」である。私は彼女がこれからどうなっていくかに強い興味をもった。

美容師としての絶対的な技術、そして、それがあるがゆえに獲得できている数々のお客さんをベースにした経営。これが美容業界の先人たちが行ってきた美容室経営の典型だろう。しかし、彼女自身には技術もお客さんもない。それでもプロの経営者として美容室経営を明確に見通している。これは経営塾の成果でもあるかもしれないが、経営塾で出会った経営者仲間たちとのビジネススタディが、塾の終了後も枯れることなく続いていることの賜物だと言ったほうが正しいだろう。

永野さんたちの代（第７期 2016年修了）は他の期に比べて同期間での自主勉強会が盛んであり、その中心に永野さんがいる。同じ内容の授業を受けた者同士という共通基盤があるからこそ、修了後も別の場所でその先の学びを発展させることができるのだろう。勉強会の資料も見せてもらったが、経営塾の教材集よりも分厚かった。「経営をやるようになってから出会った仲間はとにかく大切で、異業種であることが何よりも重要」とは永野さんの弁である。

また、こんなエピソードも聞いた。ある年にPTA活動を打診された永野さん。逡巡していると、同期の小原一将さん（株式会社サイン・ファクトリー代表取締役）から「忙しいという理由で断るのは、仕事ができない人の典型」と叱咤され、永野さんは結局PTA活動に参加。今年度は会長にもなった。この期の修了生は、お互いに遠慮も容赦もなくビシビシと接し合っているのである。

美容師個人の強みに加えて、美容室という組織の強みも求められている今日の美容業界では、美容師のキャリアモデルも変わり、そして多様化もし、店舗内協働のあり方も、働き方自体も大きく変わろうとしている。それに応える組織や評価の仕組みとはどのようなものであろうか。また、三店舗の個別の強みを、これからの時代に対応させつつ、どのように際立たせるべきか。

永野さんはその答えを性急に求めることはしないはずで、じっくりと、そして間違いなく探し当てていくだろう。老舗美容室としての基盤である「技術に厳しい店」でありながら、その時々の流行も積極的に取り入れ、髪の健康にも、地球環境にも配慮するパトスの未来は、「専門経営者」である永野さんの双肩にかかっている。

（文：竹内伸一）

株式会社パトス
〒780-0861 高知県高知市升形４－６
TEL　088-825-3877
ＨＰ　https://www.pathos-group.com

人生の旅人が
経営に挑む

9期生（2018年修了）

Scratch株式会社
代表取締役
倉知　幸一

これから紹介する倉知幸一さんが土佐経営塾の面接に現れたのは、2018年夏のこと。そのとき彼は34歳だった。経歴書を拝見すると、倉知さんは「横浜の人」で、「メガバンクでの勤務経験がある」ことが分かった。そんな彼は「人懐こい」というよりは「芯が強い」という印象で、弱冠26歳で総額100億円のシンジケートローンを取りまとめる力量を持ちながら、今になって「経営塾で学びたい」などと言っている。

私から見た倉知さんは、面接においても、授業においても、いつも独立志向が強く思えたが、聞けばそれは若い頃からの「筋金入り」だった。いつまでも人に使われるつもりはなく、一国一城の主でありたい。そう考えて大学の経営学部に進学した彼は、卒業生の半数は起業するというゼミに所属した後、銀行にも３年だけ勤めると決めて入行した。結局、「仕事のおもしろさにかまけて５年いた」と言うが、心酔している坂本龍馬が27歳で脱藩したので、その年齢までには自分も何かしなければと自らを追い詰め、初志貫徹して銀行を退職。直ちに世界を回る旅に出て、２年近く日本に戻らなかった。この「旅人」感覚が、彼の後のビジネスポリシーにも大きく影響することになる。

旅の収穫は大きかったが、いつでもその余韻に浸ってもいられない。次の方向性はごく自然に決まった。地方創生である。地方創生では現地の人たちとの関係づくりが勝負である。長旅の道中、旅人として世界の人たちと親しくはなったが、「訪れる」ことで築ける関係と「住む」ことで築ける関係の間には、決して埋まらない溝があることを思い知った。そこで倉知さんは、「現地の情報発信による地方創生」を標榜する広告代理店に入社する。そのときに彼が選べた情報発信拠点は、鳥取か高知の二択だった。ここで彼は龍馬に招かれるように高知を選択。

そして、自らの身も心も高知に根を下ろすべく、その事業の営業権を東京の広告代理店から、高知県内の飲食店プロデュースや特産品販売を手掛ける株式会社Dorago（ドラーゴ）に移し、自らもそこに移籍する。ここで彼は名実ともに「高知の人間」になった。

FM高知　第２・４金曜日 12:45～12:55
「まるごとこうちゃんの高知うまみ探訪記」にも出演中

倉知さんが土佐経営塾の門を叩いたのはちょうどこのタイミングである。グランディール社長の和食一範さん（土佐経営塾２期生）に「経営塾には倉知さんと同じマインドがあるよ」と言われて申し込んだ。彼は経営塾を次のように振り返る。

「12回のセッション（当時 現在は11回で運営）が立体的にデザインされていた。なぜ起業の失敗事例を最初に取り上げ、なぜ会計面から点検するのか。そしてなぜ次はマーケティングで、地域との関係構築が次に来て、最後に社内のリーダーシップにテーマが移るのか。終わってみれば、そして自分が社長になってみれば、すべて腹落ちする造りだ。ケースメソッドという教え方も魅力だったが、先生がもってくる毎回のテーマと、その掘り下げ方そのものが刺激的で楽しかった。受講を終えて、実際に社長になって、なおさらそう思う。私が考えるに、経営者とは結局、資金責任者である。広告代理店時代、Dorago時代、そして今のScratch代表者と、最初から社長の気分で仕事をしてきたつもりではあるが、真に資金責任を負っているのは今だけで、そこに向かう段階的なリハーサルを、実際の仕事でも、そして経営塾でも進めて来れたのではないか。」

Scratchの今後は、海外も視野に入れての高知のシティプロモーションや、県内の事業継承やハンズオン支援などにもチャレンジするべく、そのための事業拡大を構想している。この構想に踏み込むには、これまで以上に資産も持つし（ROA経営）、人も採用するし（HRM経営）、社外チームとの協働も拡大する（NetWork経営）。

経営塾で学んだのは「経営者としての覚悟と決断」と言い切る倉知さんは、「覚悟のあるパートナーとつながり、覚悟のあるチームだけが発揮できる強みを追求して、この高知を世界から羨望させたい」と近未来のScratch を展望する。

覚悟のない人間は「覚悟」という言葉を決して連呼しない。倉知さんは「覚悟共有経営」という経営の新ジャンルを切り開くつもりなのだ。

（文：竹内伸一）

Scratch株式会社
〒780-0870 高知県高知市本町２丁目１－３
TEL 080-4055-6555
ＨＰ https://scratch-kochi.jp/

TOPICS

■　高知県　理事・産学官民連携センター長　髙橋　慎一

高知県が主催する体系的なビジネス研修「土佐まるごとビジネスアカデミー」、通称土佐MBA。土佐MBAにおいて、より実践的な講座である実科に位置づけられているのが土佐経営塾です。

この土佐経営塾は、土佐市・本山町での開催に始まり、今年12年目を迎え、約220名の修了生の皆様が県内各地で活躍されています。

こうした修了生の皆様の活躍は、社会・経済構造の変化への対応が求められるウィズコロナ・アフターコロナ時代において、同期生や受講生の皆様にとって心強く、また大きな刺激になることと思います。

社会のデジタル化が進む中、土佐MBAには今年度から「グロービス学び放題」を導入し、400以上の講座をオンラインで提供することにより、気軽に学びやすい環境を整えました。

一方で、人と人とのつながりの中で学びを深める講座にも力を入れています。中でも土佐経営塾は、「考える力」「描く力」「語る力」を鍛えつつ、仲間と切磋琢磨しあえる講座です。経営に悩んだとき、ともに学んだ仲間達の存在はかけがえのないものとなることでしょう。

是非この土佐経営塾で学びの輪、仲間の輪を広げていただければと思います。

■　高知県産学官民連携センター
人材育成支援担当　宮地　亜希

今年度の土佐経営塾を担当します宮地です。県庁では土木や環境の仕事をしてきました。ココプラは２年目で、伝統ある経営塾の担当になり緊張していますが、皆様のサポートができるよう精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！

■　令和３年度「土佐経営塾」
受講生募集のお知らせ

土佐経営塾の受講生を
絶賛大募集中です！
詳細はＨＰを
ご覧ください！

同窓会だより

土佐経営塾８期生
同窓会幹事
株式会社クリーム 取締役
片岡　佐代

「土佐経営塾」への入塾は2017年、嫁ぎ先の両親から夫と共に経営を引き継ぎ、経営者として必要な資質や視点を模索している時期でした。同期生達とのディスカッション では触発されることが多く「蟻の目」「鷹の目」の立体的な考え方も得られました。今でも壁にぶつかったとき、私には考え抜くことが壁を乗り越える原動力となり、オリジナルの大切な財産となっています。

弊社は印刷会社として発足しましたが、第4次産業革命ともいえるデジタル化・ペーパーレス化の波を乗り越えるためこれまでのノウハウを活かし、デザイン・編集・色彩表現・WEB・動画と新しい分野に進みつつあります。

今後は「土佐経営塾」で得た財産を活かし、お客様と効果的な化学変化を起こせる仕事でお役にたちたいと考えています。

Another Story
～ 土佐経営塾を支えた人 ～

令和２年度、第11期の土佐経営塾を担当させていただきました山本です。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、最終回以外のすべての講義をオンラインで実施しました。また、修了生オンラインミーティングや修了生通信「Session」の創刊といった、新たな修了生活動をスタートさせた１年でもありました。

こうした新たな取組を進める中、田村先生、竹内先生には並々ならぬご尽力をいただきました。また、11期の皆様、修了生の皆様にお力添えをいただいたおかげで走りきることができた、実り多き１年間だったと思います。この場をお借りして、皆様に改めてお礼申し上げます。そして、土佐経営塾の皆様と時間を共にする中で、私自身も物事の捉え方、考え方が変化していったように思います。仕事を通して、自分自身や周囲の方々と真摯に向き合っておられる皆様と共にした時間は、私の人生において、かけがえのないものとなりました。

今、私はココプラを離れて福祉関係の部署におります。仕事をする際には、今でも、11期生の渡部幹太さんが修了式でおっしゃっていた言葉を思い出します。

「『誰が幸せになるのか』を念頭に置いて、
未熟ではあるが不熟ではないという気持ちを持ち続けたい。」

部署は違えど、これからも土佐経営塾で学ばせていただいたことを胸に、真摯に仕事と向き合いたいと思っています。

土佐経営塾11期担当
山本　唯
現在：高知県
子ども・福祉政策部
障害福祉課